

紀元二千六百年式典及び奉祝会と式殿について、 あるいは建築の仮設性が示唆するもの

米 山 勇*

目 次

はじめに

1 紀元二千六百年式典及び紀元二千六百年奉祝会について

- (1) 国をあげての記念行事
- (2) 紀元二千六百年式典及び奉祝会の概要
- (3) 花電車

2 式殿の建築的特質と移築

- (1) 式殿の建築概要
- (2) 式殿から国民錬成所へ—当時の新聞記事を中心に
- (3) 光華殿の建築について

3 江戸東京たてもの園ビジターセンターと2つの工事

- (1) 国民錬成所の廃止と武蔵野郷土館の開設、そして江戸東京たてもの園ビジターセンターへ
- (2) 2つの工事—あらわれた旧光華殿

4 建築の仮設性と永遠性

- (1) 不可解さの意味
- (2) 神事と社殿、そして建築の仮設性に念じられたもの

おわりに

キーワード 紀元二千六百年 式殿 国民錬成所 光華殿 花電車 仮設 武蔵野郷土館
江戸東京たてもの園ビジターセンター

はじめに

1940年（昭和15）11月に宮城（現皇居）前広場で行われた「紀元二千六百年式典」及び「紀元二千六百年奉祝会」は、昭和天皇・香淳皇后出御の下、内閣主催で盛大に開催され、11月14日まで関連行事が繰り広げられるなど、国民の感興は最高潮に達した。

*東京都江戸東京博物館研究員

会場となった式殿は、大蔵省営繕管財局の設計、清水組の施工によるもので、式典3日前の11月7日に竣工した。祭祀終了後、小金井大緑地に移設され約1年かけて恒久的仕様に改修、「国民錬成所光華殿」と命名され、1954年からは建具を整備した上で武蔵野郷土館の本館として利用された。1993年（平成5）に改修がなされ、東京都江戸東京博物館分館・江戸東京たてもの園のビジターセンターとなり、今日に至っている。

江戸東京たてもの園では、2008年（平成20）にビジターセンターの耐震補強工事を、2024年（令和5）に同じくビジターセンターの長期修繕計画に基づく修繕工事を行ったが、それらの中で、いくつかの興味深い事実が発見された。

本稿では、現在江戸東京たてもの園のビジターセンターになっている旧光華殿に関し、まず建てられた当初の目的であった紀元二千六百年式典及び奉祝会と、会場となった式殿について、館蔵資料を紹介しながら論じる。次に、2008年と2024年の2回の工事に際し発見された事象から、いくつかの要点を抽出し、それらが意味するものについて論究する。

1 紀元二千六百年式典及び紀元二千六百年奉祝会について

（1）国をあげての記念行事

今日、「紀元二千六百年」を冠して回顧される祭祀には、いくつかの呼称がある。「紀元二千六百年祭」、「紀元二千六百年祝典」、「紀元二千六百年式典」、「紀元二千六百年記念式典」、「紀元二千六百年奉祝祝典」、「紀元二千六百年奉祝会」、「紀元二千六百年奉祝紀元節大祭」等々である。これらは夫々、具体的な式典を指すものもあれば、1940年（昭和15）前後に行われた国をあげての祝賀行事全般を指すものもある。

本論で論究の対象とするのは、1940年11月10日および翌11日に、宮城外苑にて執り行われた2つの祝事、すなわち「紀元二千六百年式典」（11/10）と「紀元二千六百年奉祝会」（11/11）である。本論で両者を総合して呼ぶ際は、「紀元二千六百年式典及び奉祝会」の言辞を用い、紀元二千六百年を記念して行われたさまざまな行事全般を指す際は、「紀元二千六百年記念行事」と呼称することとする。

紀元二千六百年記念行事は、1940年（昭和15）が紀元2600年に当たる（紀元節は、古事記や日本書紀で、日本の初代天皇とされる神武天皇の即位日をもって定めた祝日。



【写真1】 紀元二千六百年記念観兵式絵葉書
陸軍省 1940年頃 95651226



【写真2】 紀元二千六百年奉祝美術展覧会絵葉書 朝
伊東深水、高林スタジオ/謹製 1940年
95651233



【写真3】 紀元二千六百年奉祝美術展覧会絵葉書 日
出處日本
横山大観、高林スタジオ/謹製 1940年
95651234



【写真4】 「紀元二千六百年奉祝国民歌」
楽譜
東京新興音楽出版社 1940年
2月5日 87975828



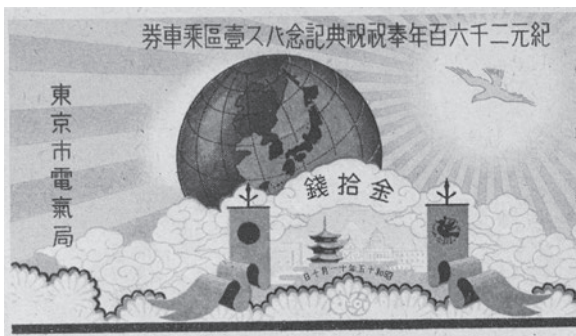
【写真5】 ポスター「皇紀二千六百年
記念準備貯金」
東京都市通信局 1938年
09200182



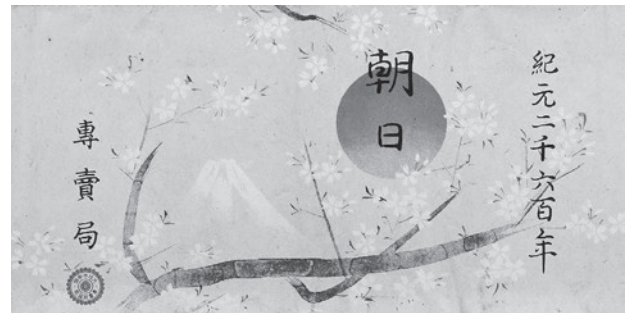
【写真6】 紀元二千六百年記
念マッチ箱
1940年 93200329



【写真7】 紀元二千六百年
御弁当ラベル
井筒屋商店 1940
年 99001256



【写真8】 紀元二千六百年奉祝祝典記念バス一區乗
車券（半券）
東京市電氣局 1940年 06000649



【写真9】 たばこ 朝日 紀元二千六百年 包装紙
専売局 94001144

日付は紀元前660年2月11日。1873年（明治6）に制定された）ことを祝った一連の行事である。記念行事の計画は、1935年に遡り、当時の内閣総理大臣岡田啓介を会長とする「紀元二千六百年祝典準備委員会」が発足、準備がはじめられた。

開催された記念行事は、紀元二千六百年特別観艦式（10月11日）、紀元二千六百年記念観兵式（10月21日）をはじめ、紀元二千六百年奉祝美術展覧会、天覧武道大会、児童唱歌大会など、多岐にわたった【写真1～3】。また、内閣奉祝会・日本放送協会の主宰により、「奉祝国民歌」が制作され、東京都市通信局からは「皇紀二千六百年記念準備貯金」が募集された【写真4・5】。

このほかにも、電車やバスの記念乗車券からたばこ等の嗜好品に至るまで、ありとあらゆる種類の記念物品が販売された【写真6～9】。まさに国を挙げての祝賀ムードが日本に横溢したのである。そのクライマックスとなったのが、中心的イベントたる「紀元二千六百年式典及び奉祝会」であった。

（2）紀元二千六百年式典及び奉祝会の概要

紀元二千六百年式典は、1940年（昭和15）11月10日、紀元二千六百年奉祝会は11月11日に、どちらも昭和天皇・香淳皇后出御の下、宮城外苑（現在の皇居前広場）で行われた【口絵1・2】【写真10】。『奉祝紀元二千六百年』には以下の記述がある¹⁾。

政府に於ては、世界史上に燦然たる光輝を放つ紀元二千六百年の意義深き祝典に関し、紀元



【写真10】 絵葉書「（紀元二千六百年奉祝記念）馬場先門の奉祝塔」

東京絵葉書組合 1940年 95651194

二千六百年祝典評議委員会の議決に基づき慎重に審議攻究し、この曠古^{こうこ}の祝典を、一、祭典、二、式典、三、大観兵式、大観艦式、四、奉祝会の一連した四大事項に決定したのであった。（中略）かくて祭典及び大観兵式、大観艦式の盛儀を見た祝典は愈々中心行事たる式典並びに奉祝会を待つばかりとなった。

『天業奉頌』によれば、「式典は整列・臨御・国歌『君が代』奉唱・内閣総理大臣寿詞奏上・紀元二千六百年頌歌斉唱・萬歳奉唱・還御・散会の次第で行い、参列者は大勳位以下国民各階層を網羅して五萬五千人」の予定で挙行された²⁾。実際の式典次第は、以下の通りである³⁾。

日 付：1940年（昭和15）11月10日

場 所：宮城外苑（現在の皇居前広場）

参列者：49,017名（10：30入場終了）

11：07 両陛下出御

君が代奉唱ののち、近衛文磨内閣総理大臣が寿詞を奏上

11：25 万歳三唱、その後君が代奏楽し両陛下便殿入御

11：35 両陛下式場を発御 式典終了

一方、式典の翌日に行われた奉祝会は、「整列・臨御・国歌『君が代』奉唱・紀元二千六百年奉祝会総裁奉祝詞奏上・外国使臣首席奉祝詞奏上・開宴・奉祝国民歌『紀元二千六百年』斉唱・萬歳奉唱・還御・散会の順序で行い、開宴中に吹奏楽・雅楽等を催すことになった。当日は君臣和楽の宴であるので、酒饌を供し又このよき日の参列を永久に記念すべき記念品を贈呈すること」とされた⁴⁾。実際の奉祝会次第は、以下の通りであった⁵⁾。

日 付：1940年（昭和15）11月11日

場 所：宮城外苑

参列者：49,886名（11：00受付開始、13：00入場終了）

14：04 両陛下出御

近衛文磨内閣総理大臣が奉祝会開始の旨を奏上

学生生徒児童3,000名の斉唱団が奉祝国民歌紀元二千六百年を唱う

14：47 万歳三唱、近衛会長が奉祝会終了を告げる

15：00 両陛下式場を発御

（3）花電車

式殿に関する考察を行う前に、花電車について触れておきたい。花電車は、戦勝や皇室の慶事、都市イベントなどに際して、営業用車両や専用の台車に旗や電飾、造花や人形などをあしらって、通常の営

業運転の経路とは別個に運転日・経路を設定し、運転した装飾電車のことである⁶⁾。その起源は、日露戦争における遼陽占領(1904・明治37)を祝し、東京電車鉄道が、電車にイルミネーションをつけて市内を走らせたことであった。当初は、電車の外側を装飾するだけで、車内に乗客をのせていた。1915年(大正4)、大正天皇御大典を記念した花電車では、台車の上に舞台を作り装飾をしたため、運転手と車掌以外の人をのせなくなったという⁷⁾。

紀元二千六百年記念行事として運行された花電車について、『東京市紀元二千六百年奉祝記念事業志』は、次のように記している⁸⁾。

紀元二千六百年奉祝の為本市は花電車の運転を計画した、この計画は昭和十五年十月四日各省次官會議決定の紀元二千六百年奉祝式及奉祝行事実施要領の趣旨に依り急遽決定したもので花電車の運転は去る昭和十一年十一月の「帝國議事堂新築落成記念」以来四年振りであり、その構想の装麗は昭和三年十一月 今上陛下御即位の大礼を奉祝記念する昭和大礼奉祝花電車以来将に十二年振りである為、市民の感激と歓喜は非常なるものであった。

奥原哲志の研究によれば、「紀元二千六百年奉祝記念花電車」は、1940年(昭和15)11月10日、11日、13日、14日、15日の5日間、5両編成で、全部で5種運行された。大正天皇御大典記念の花電車と同じく、台車の上に装飾された舞台が作られており、運転手と車掌だけがのるようになっていた。意匠図案は高島屋、製作は東京市電気局であった⁹⁾。

5種の内容を記すと、日の丸提灯と、三種の神器の一つである金色の八咫鏡やたのかがみによる「奉祝」、金色の雲、菊、扇、光る矛、2体の回転する舞姫人形による「浦安舞」、式典会場自体をデザイン化した「聖壽萬歳」、2つの菊飾りによる球体とカラス、鷲、八咫鏡による「八紘一宇」、そして民族衣装を着た少年少女6人が日の丸を手に万歳をする「四海歓喜」である【口絵3～7】。

永井荷風は『断腸亭日乗』の中で、「十一月十六日。陰。(中略)水天宮門前に花電車数輛置きならべあり。見物人雑踏す。一輛三千円かかりしなど語り合へり」¹⁰⁾と、紀元二千六百年式典及び奉祝会の後に、上記の花電車が水天宮前に陳列された様子を記している。建築ではないが、過剰ともいえる装飾をまとった乗り物が、一時的に都市東京を彩り、人びとの関心を奪った特異な事例として、興味深い。

2 式殿の建築的特質と移築

(1) 式殿の建築概要

紀元二千六百年式典及び奉祝会の会場となった式殿【写真11・12】の設計は大蔵省営繕管財局、施工は清水組が行った。式殿の建築及びそれに先立つ宮城(現皇居)外苑の敷地整備については、『天業奉頌』に詳しく述べられている¹¹⁾。

東京市に於ては紀元二千六百年の奉祝記念事業として宮城外苑整備の事業を起し、肇国奉公隊ちやうこくの



【写真11】 紀元二千六百年奉祝式典 記念絵葉書 式典式場 94650368



【写真12】 紀元二千六百年奉祝式典 記念絵葉書 式典式場正面 94650369

勤労奉仕の下に著々その工を進めて宮城前広場・道路等も多人数が集合するに適当な状態に整えられることになったので、その進捗と共に式場の設備が進められた。式場は外苑二重橋寄、七万七千余坪の敷地を相し、この使用については宮内省の許可を受け、工事は昭和十五年七月一日に著工された。

畏くも、^{れい}両陛下の臨御を仰ぐ式殿は式場の中核であるから、この設計に就いてその衝に当たった営繕管財局に於て極力慎重を期し、二重橋外緑地に東面して建設することとなり、様式は優雅な入母屋寄棟（ママ）の寝殿造りとし、使用材料等には特に堅牢なるを用い、屋根は杉皮葺とした。式殿の背後に密接して、便殿・皇族御休憩所その他の設備を有する附属の建物を建築した。式殿は翼部と中央部とに分たれ、建坪七百四十平方メートル、正面五十一・三メートル、奥行中央部十三・五メートル翼部九・九メートル、高中央部八・五メートル翼部六・六六メートル、屋根の勾配は引通しとし、中央部は六寸五分の勾配、翼部は六寸の勾配で、屋根の構造は耐風耐震を考慮して洋式小屋に組み、これに枯木を固定し深い軒を支え日本固有の建築技法を用い、化粧樫に反りを打たせ、天井は格天井とし床板には特に意を用いた。

ここで述べられている式殿の建築的特質に写真資料からの考察を加味してまとめると、以下のようになる。

- ①屋根は、入母屋造杉皮葺き
- ②平安時代の貴族邸宅の様式であった寝殿造を基調とする
- ③柱間には建具を入れず吹き放ちとする
- ④建築面積740m²
- ⑤両翼部と中央部からなる
- ⑥小屋組は洋小屋とする
- ⑦天井は格天井とする

（2）式殿から国民錬成所へ—当時の新聞記事を中心に

紀元二千六百年式典及び奉祝会が終了すると、諸方から式殿譲渡の申込みが寄せられ、式殿の扱いが検討されるようになった。ここでは、祭事終了から、建物が小金井に移築されるまでを当時の新聞記事を中心に見ていきたい。

1940年（昭和15）11月17日の読売新聞夕刊は、式殿の取り壊しと保存の可能性について、次のように報じている。

奉祝式殿の保存 改めて閣議で決定

一億国民の胸に限りない感激と歓喜を刻みこんだ紀元二千六百年奉祝の盛典が行われた宮城外苑式場はあの日、あの時の感激を偲ぶ市民がまだ陸続と拝観するなかに十六日からいよいよとりこわしがはじまった（中略）宮城外苑では大蔵省営繕管財局の手でまず式場の外廓から取り片づけが行

われており、来月十五日までには荘厳な杉皮葺き寝殿造りの式殿も取り除かれることになった。

式殿保存については祝典事務局はじめ関係当局に府、市、文部省その他地方官庁、民間団体等からその譲渡申込が殺到しているが、祝典事務局では関係各方面と慎重協議の結果「式殿は曠古^{こうこ}の盛典を永久に記念すべき適当な施設として保存する」ことに決し、取りあえずその管理を紀元二千六百年奉祝会に委ね、従来の譲渡申込は一切白紙に還し、関係当局が改めて慎重協議のうえこれを閣議にかけて決定することになった。[読売1940.11.17夕]¹²⁾

一方、およそ1か月後の朝日新聞は、その後の「式殿」の所在について言及し、「国立国民鍊成所」の中心施設になることに決定したと報じている。

奉祝式殿の行方

紀元二千六百年奉祝式殿宮城外苑からいつの間にか姿を消し、十八日には地ならしさえ完了、全くもとの外苑に復してしまっただが、いったいあの式殿はどこに消えたのか——行方を探すと、深川区の越中島だった。式殿を造営した清水組の越中島材料置場内にバラック建だが、木の香新しい特別の倉庫を新設し、取壊した式殿は一切その中に保管されているのだ。[朝日1940.12.20夕]¹³⁾

奉祝式殿、“国立鍊成所”に決る 文部省で再建保存

紀元二千六百年式典及び奉祝会の挙行された宮城外苑の式殿は神奈川県奉祝会その他各方面から譲り受けの熱烈な希望があったが政府ならびに紀元二千六百年奉祝会では去月中旬以来数回合議を重ね慎重研究の結果、曠古^{こうこ}の祝典に際して昂揚された国民的感激を記念し永く国体觀念^{かんよう}の涵養に資するべくかねて文部省で企画中の『国立国民鍊成所』をこの際実現し、式殿をその中核施設とすることに意見一致をみるに至り二十日正式に祝典事務局よりその旨発表した。(中略)なお奉祝会では『国立国民鍊成所』の敷地決定次第、明春直ちにこの工事にとりかかる筈である。[朝日1940.12.21朝]¹⁴⁾

このように、式殿は解体され、部材が清水組の越中島材料置場内に保管されていた。そして、敷地が決まり次第、国民鍊成所¹⁵⁾の中核施設として再建されることになったのである。その後、敷地はいったん多摩川畔に決まることが報じられるなど混迷したが、1941年（昭和16）8月6日付の新聞が、小金井への移築が決定したと報じている。

桜の小金井に国民鍊成所 二ケ年で完成

紀元二千六百年記念祝典の式殿をそのまま移築して建設されるわが国最初の常時国民鍊成所の敷地については昨年以來文部、大蔵両省および祝典事務局において鋭意詮衡を重ねていたが、審議の結果、府下小金井に意見の一致をみたので五日午後府参事会の決議によって手続万端を終り最後の決定をみた。(中略)これまで鍊成所候補地としてあげられたものは神奈川県下でも六ヶ所、府下で

は砦・神代、大泉などが有力な候補地としてあげられ中でも喜多見町が最も有力であったが、土地使用、都市計画その他の関係を考慮して遂に小金井町に決定をみたものである。[読売1941.8.6朝]¹⁶⁾

さらに10月には、設計案が完成したとして、各建物の概要が示されるとともに、「設計見とり図」が公開された。

再現する奉祝式殿 国民錬成所の設計が愈々完成

紀元二千六百年奉祝式殿を移設保存して開設する「国民錬成所」の敷地は既報のごとく紀元二千六百年奉祝会、同内閣祝典事務局をはじめ文部省、大蔵省等関係方面の協議によって府下小金井町地内九万一千坪の土地と決定したが、このほどその設計図が大蔵省営繕管財局の手で出来上った。これによると“あの日”の盛儀をしのぶ荘厳典雅な式殿は一万坪の広場を前にしてそのまま再現し、式殿に向って左には図のごとく本部、研修室、書庫を、右には長期、中期、短期の各学寮四棟をはじめ屋内訓練所、^{みそぎしよ}禊所、武道場、弓道場等を設置する。これらの附属建物は大部分が木造平屋で各学寮にはそれぞれ七、八十人位を収容できる。[朝日1941.10.3朝]¹⁷⁾

こうして完了した設計案に基づき、いよいよ工事が開始される。地鎮祭が10月30日に行われた。

奉祝式典場 移築地鎮祭

輝やく紀元二千六百年の晴れの式殿を永遠に保存すべく^{かはん}過般二千六百年奉祝会では大蔵省に式殿の移築を委嘱したがこのほど府下小金井町の敷地の整備が完了したので三十日午前十一時橋田文相をはじめ田子奉祝会副会長、谷口営繕管財局長官、風見章氏ら四百余名が参列、式殿の移築および式殿を中心として建設の文部省国民錬成所建設工事地鎮祭を行った。[読売1941.10.31夕]¹⁸⁾

そして約半年後の1942年（昭和17）5月11日、上棟式が挙行されている。

再現する“光栄の式殿” 国民錬成所の上棟式

一昨年十一月十日宮城前で執り行われた紀元二千六百年式典の、その光栄の式殿を再現保存する国民錬成所は、府下小金井町の敷地に昨年十月地鎮祭を行い、以来工事中であったが、十一日午前十時から式殿ならびに同錬成所諸建物工事の上棟式を行った。[朝日1942.5.12夕]¹⁹⁾

それからさらに半年後の1942年（昭和17）11月11日、国民錬成所は竣工するとともに、その中心をなす、もと紀元二千六百年式典及び奉祝会の式殿は、秩父宮殿下によって「光華殿」と命名された。翌11月12日付の新聞は、以下のように報じている。

秩父宮殿下「光華殿」と御命名 国民錬成所開所式

紀元二千六百年記念式典の式殿を移し建てられた小金井国民錬成所の竣工ならびに開所式は、二年前式典の行われた十一日、^{かしこ}畏くも高松宮殿下の台臨を仰ぎ首相代理星野書記官長、橋田文相、賀屋蔵相、松平宮相、紀元二千六百年奉祝会長近衛公代理佐佐木行忠候、松村府知事等六百余名参列して、厳粛に挙げられた、高松宮殿下には午後一時四十五分同所御着、同二時式場に成らせられた。式は日枝神社秋岡宮司斎主となって進められ殿下には恭しく玉串を御奉奠遊ばされた。続いて橋田文相以下玉串奉奠し、枢密顧問官奈良武次陸軍大將は参列者総代として神前に玉串を捧げた。午後三時式を終り、殿下には一旦御休憩の御後、午後三時十一分奉祝会より文部省に式殿はじめ錬成所の建物を贈呈する式に臨ませられた。工事経過の報告に次いで奉祝会長近衛公（佐佐木候代読）橋田相式辞ののち、奉祝会総裁秩父宮殿下より、式殿を『光華殿』と御命名遊ばさる趣の発表あり、近衛公代理佐佐木侯爵より橋田文相に目録を贈呈、首相（代読）松平宮相、松村府知事の祝辞あって三時四十五分贈呈式を終った。〔朝日1942.11.12朝〕²⁰⁾

以上述べてきたように、紀元二千六百年式典（1940年（昭和15）11月10日）及び奉祝会（同年11月11日）の会場として建築された式殿は、式典終了後しばらく清水組の倉庫に解体保管されたのち、1941年（昭和16）8月に小金井に移築されることが決定した。そして、同年10月30日に地鎮祭、翌1942年（昭和17）5月11日に上棟式が執り行われ、同年11月11日に竣工した。その際「光華殿」と命名され、国民錬成所の中核建築として再生したのである。

（3）光華殿の建築について

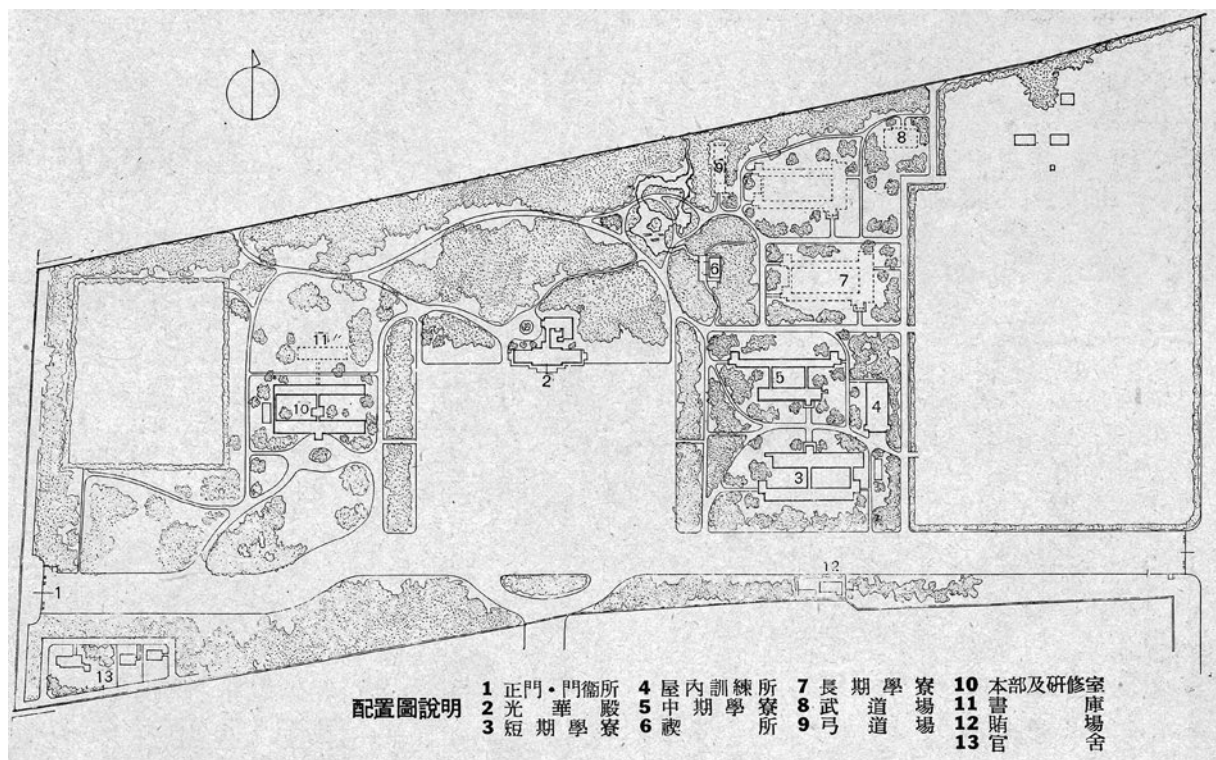
光華殿を中核とした国民錬成所の建築概要について、当時の『新建築』²¹⁾は、以下のように記している【図1】【写真13・14】。

「^{ちやうこく}肇国の精神にのっとり、^{しん し とつこう}慎思篤行よく皇国の道を修め、率先奉公もって^{こうえん こう ぼ}宏遠なる皇謨を翼賛し奉り、皇国使命の達成に参ずる国民の先達を錬成す」と綱領に明示する如く、当国民錬成所は国民各層にわたる指導的人物を入所せしめて、^{きやうこう}国体の本義にもとづき、実践躬行もって国民先達たるの錬成をなす。

しかして光輝ある二千六百年式典に当り、^{かしこ}畏くも 天皇 皇后両陛下の臨御を仰いだ「紀元二千六百年式典場」を中核に^{はいたい}拝戴し、本部及び短期、中期、長期の各学寮、武道場、^{みそきしよ}禊所等を包含する計画である。

錬成は学寮単位の編成によつて行い、農事作業、錬武の行修及び研修、静座、礼儀、諸道の内修を中心に課す。

紀元二千六百年式典及び奉祝会の式殿を移築した光華殿については、旧状とほぼ同じ姿で再構築されたが、一点大きな差異があった。それは、外周の建具である。旧建物は、寝殿造を基調としていたこと



【図1】国民錬成所配置図

(『新建築』第19巻第1号、1943年、p.1。1941年10月3日、新聞紙上で発表された「設計見とり図」とほぼ相違ない。)

と祭祀の式殿という性格から、柱間には建具を入れず吹き放ちとしていたが、竣工した光華殿の外回りは、すべての柱間に建具が入っている。これは言うまでもなく、「式殿を永遠に保存すべく」²²⁾ 移築され、国民錬成所の中核的機能を有する新建築に課せられた使命からであろう。

【写真15】をよく見ると、軒下の垂木から吊金具が下がっており、建具は蔀戸であったと考えられる。一方、後述するように建物は戦後、武蔵野郷土館を経て、江戸東京たてもの園のビジターセンターとなって現在に至っている。現況では、建物回りを切目縁としているが、軒下の垂木に金具の痕跡が見られる【写真16】。これらは垂木6本ごとに取り付いており、【写真15】において視認される吊金具の位置と合致する。以上のことから、国民錬成所光華殿として整備された際、開放した蔀戸を引っ掛ける吊金具を垂木に固定するために取り付けられた金具が残存しているものと判断できよう²³⁾。

3 江戸東京たてもの園ビジターセンターと2つの工事

(1) 国民錬成所の廃止と武蔵野郷土館の開設、そして江戸東京たてもの園ビジターセンターへ

1943年(昭和18)、国民錬成所は、国民精神文化研究所と合体し教学錬成所となった。そして1945年、終戦とともに廃止された文部省教学錬成所の跡地一帯は宮内庁用地となり、東宮御仮寓所として葉山御用邸の建物が移築されたのをはじめ、既存の廠舎を改築して学習院中等科が開設された。

一方、終戦前後の混乱のなかで停滞・後退した小金井緑地の建設・整備の動きが1952年から始まった。



【写真13】 国民錬成所光華殿全景（『新建築』第19巻第1号、1943年、p.3）



【写真14】 国民錬成所光華殿背面（『新建築』第19巻第1号、1943年、p.3）



【写真15】 国民錬成所光華殿外観詳細
（『新建築』第19巻第1号、1943年、p.1）



【写真16】 江戸東京たてもの園ビジターセンター現況²⁴⁾

東京都は、立太子記念事業として、社会教育施設を伴うレクリエーション施設を建設することになり、その場所として小金井緑地が選定された。具体的には、旧光華殿を中心施設とする博物館「武蔵野郷土館」を設けることが決定し、緑地内に桜その他の植物を植えることなどの計画が立てられた。この結果、1954年（昭和29）、小金井緑地は武蔵野郷土館と共に小金井公園の名称で開園するに至った²⁵⁾。

武蔵野郷土館は1991年（平成3）に博物館活動を終え、復元建造物をはじめ考古・民俗・美術・図書などの多くの貴重な資料は、1993年に開園した東京都江戸東京博物館分館・江戸東京たてもの園に引き継がれた。旧郷土館の建物は、江戸東京たてもの園のビジターセンターとして再生し、現在に至っている。

（2）2つの工事—あらわれた旧光華殿

江戸東京たてもの園ビジターセンターに対しては、これまで2回の工事が行われている。本節では、それらが実施された際の調査により見出された事実について述べる。

一度目の工事は、2008年（平成20）8月より行われた耐震補強工事である【写真17】。本工事に伴う調査では、建物内に足場が組まれ、天井裏に残された旧光華殿の軸部や飾り金具、壁紙、天井の格縁といった旧材や小屋組が観察できた【写真18】。見出された要点を以下に記す。



【写真17】平成20年度耐震補強工事及び調査

①棟札

棟木より棟札が発見された【写真19】【図2】。記載内容から、移築され国民錬成所の中核建築として上棟した際のものであろう。表面には紀元二千六百年式典及び奉祝会当時の首相であった近衛文麿²⁶⁾、第2次近衛、東條英機の両内閣で文部大臣を務めた橋田邦彦²⁷⁾、大蔵次官であり、この建築の設計者である営繕管財局長官を兼任した谷口恒二²⁸⁾の名が連記されている。また裏面には、施工を行った清水組の名がある。

②壁紙

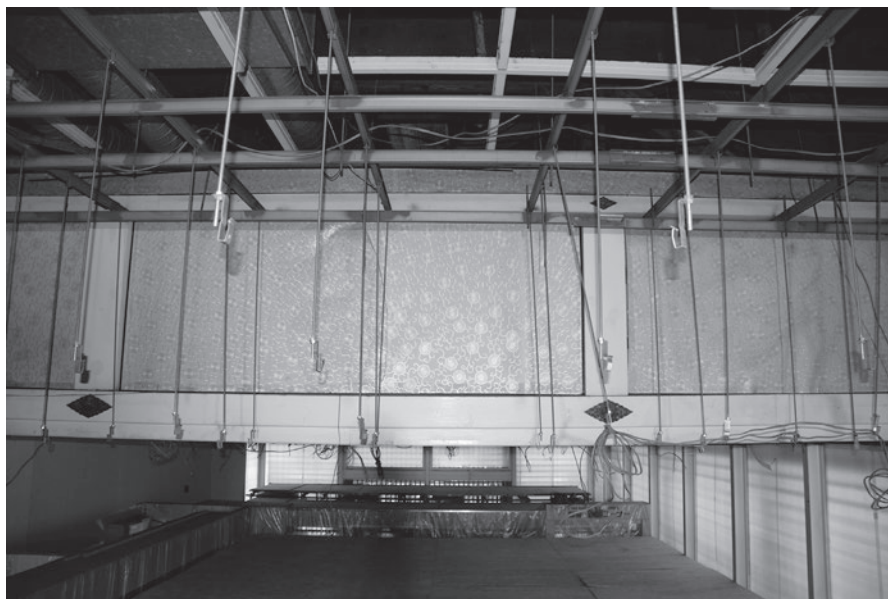
長押上小壁には菊花紋の壁紙が貼られる。式殿は昭和天皇・皇后両陛下の臨御を前提に建てられたが、壁紙の菊花紋は「十六葉」の箇所と「十五葉」の箇所が見受けられた。一方、壁紙の合わせ目の処理は緻密とは言い難く、文様に不連続な箇所が生じていた【写真20】。

③飾り金具

本工事に伴う調査でもっとも驚かされたのが、「飾り金具」である。【写真18】からもわかるように、長押と束の接合部には、菱形の釘隠し取り付けられている。一見すると銅製のように見受けられるが、70年（調査当時）の歳月に比して緑青等は生じていない。そこで、損壊したものを調べたところ、石膏に上塗りを施したものであることが判明した【写真21】。

④小屋組

小屋組については、『天業奉頌』に「屋根の構造は耐風耐震を考慮して洋式小屋に組み」との記述があっ



【写真18】内部に組まれた足場より天井裏に上り、撮影した旧光華殿の軸部と格天井格縁



【写真19】【図2】発見された棟札

<p>天長地久國運隆昌</p> <p>奉 上棟 國民錬成所修養殿</p> <p>昭和十七年五月十一日</p> <p>營繕管財局長官 谷口恒二</p> <p>文部大臣 橋田邦彦</p> <p>紀元二千六百年 公爵近衛文麿</p> <p>奉祝會長</p>	<p>請負人 株式會社 清水組</p>
表	裏

た²⁹⁾。実際に目視したところ、洋小屋のキングポスト・トラスで、真束の根元を挟み梁で連結、各材の接合部をボルトで補強していた【写真22】。安全上の問題から小屋梁の端部には接近し得なかったが、目視によれば京呂組であった。

⑤格天井

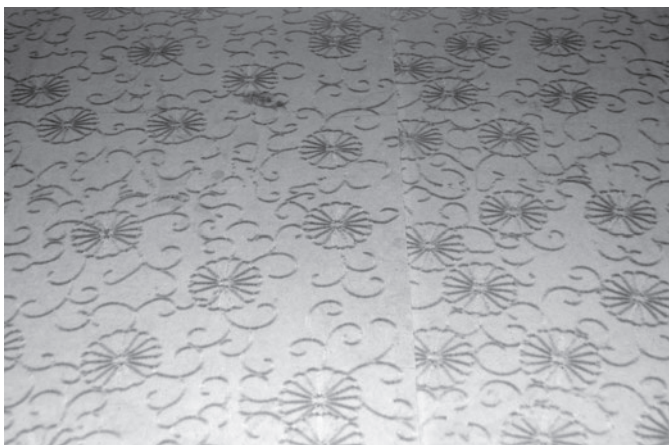
写真資料より、旧建物の天井は格天井だったことがわかっていたが、調査によって格天井の格縁が確認された【写真23】。

間隔を実測したところ、かなりのバラつきがみられた【図3】。

次に、2度目の工事であるが、2023年（令和5）7月より行われた銅板屋根の葺き替え、軒先の調整、外壁の補修塗装である。建物の軒高さまで足場を組み、素屋根を架けて外壁や庇、軒天などをケレンしながら色の変遷を調べ補修し再塗装をおこなった。

2008年の耐震補強工事に伴う調査では、天井裏に隠れた旧建築の部材等を確認することに主眼が置かれたが、2023年の修繕工事に際して行われたのは、日常的に視認されている部分の調査であった。したがって、新たな発見はないと思われたが、内法長押と柱の接合部に取り付けられている釘隠しの六葉をよく調べたところ、陶器製であることが判明した【写真24】。

この部材は、江戸東京たてもの園において、日常的に来園者を迎え入れるエントランスの頭上に取り付けられているものであり【写真25】、1940年（昭和15）に執り行われた紀元二千六百年式典及び奉祝会の式殿を記録した画像にも写っている象徴的な「飾り金具」である（【写真11】【写真12】参照）。当然、銅等の金属で作られているものと考えていたが、陶器製とは驚きであった。



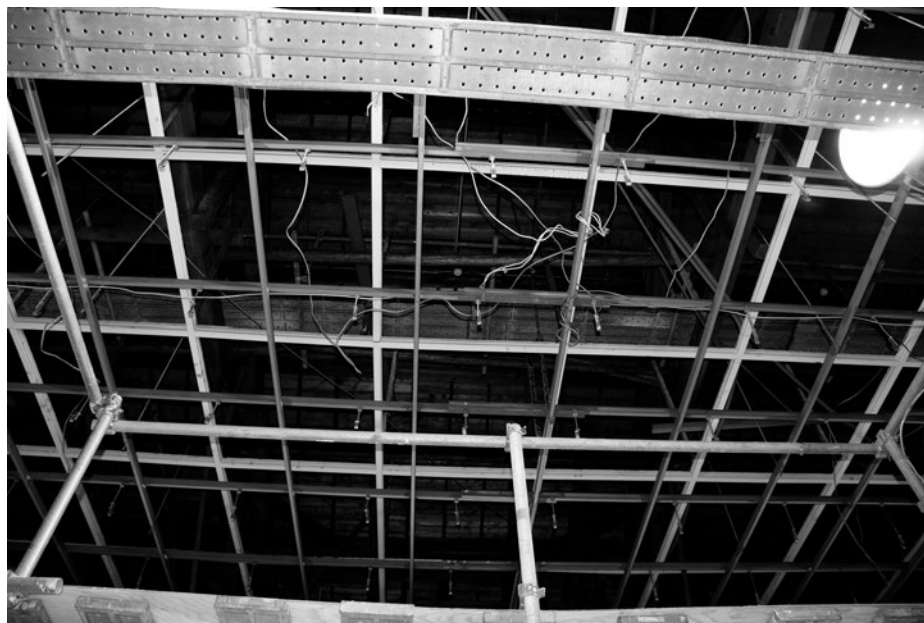
【写真20】 壁紙



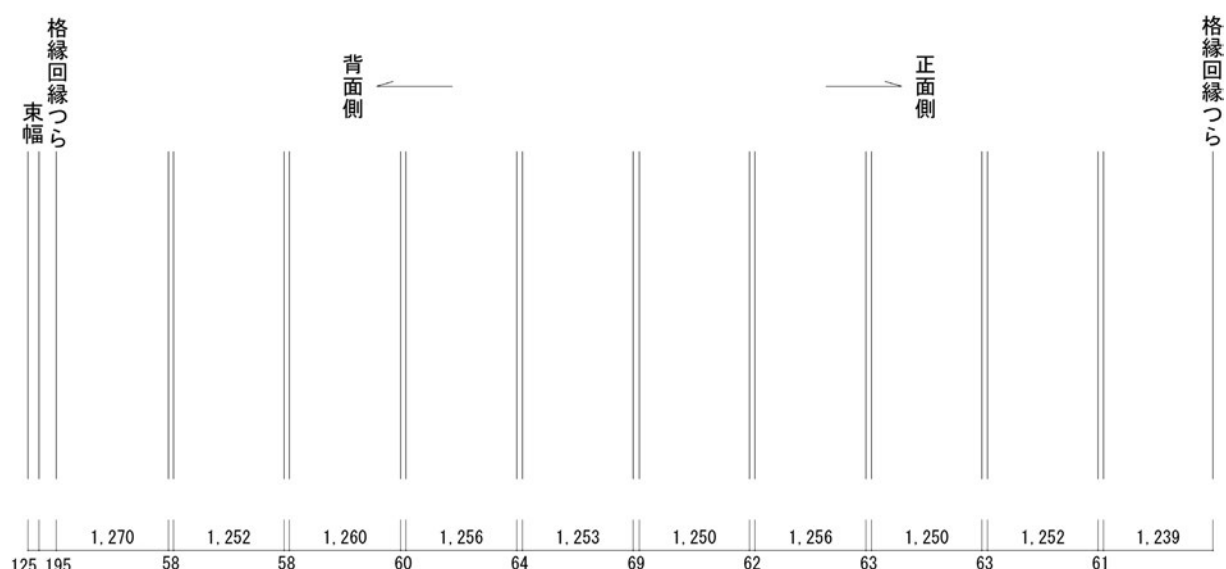
【写真21】 損壊した「飾り金具」（釘隠し）



【写真22】 キングポスト・トラスの小屋組



【写真23】 格天井の格縁



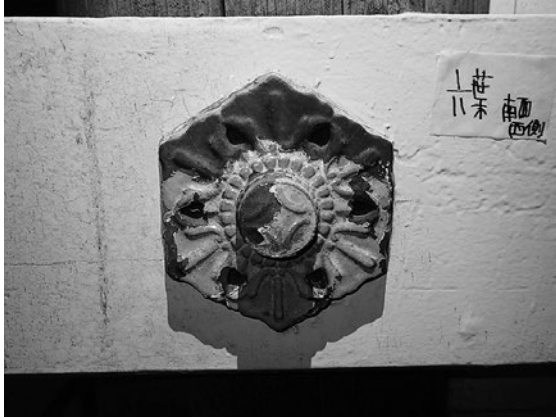
【図3】 格天井の格間

4 建築の仮設性と永遠性

(1) 不可解さの意味

江戸東京たてもの園ビジターセンターに対して実施された2度の工事に伴う調査で見出された諸事項について述べてきた。本建築はもともと、紀元二千六百年式典及び奉祝会という国典の式殿として、天皇・皇后両陛下の臨御を前提に建築された。国史、政治、典礼、さまざまな意味で、きわめて重要な建築として位置づけられたはずである。

しかしながら、建築調査の結果、壁紙、飾り金具、格天井等の仕上げには上質とはいえない箇所が散



【写真24】釘隠しの六葉³⁰⁾



【写真25】現在のエントランス³¹⁾

見された。また、『天業奉頌』等に記された建築概要にも、若干の疑問点がある。とくに顕著と思われるのが、以下の5点である。

- ①壁紙の合わせ目の処理が緻密でなく、文様に不連続な箇所が生じていた。
- ②「飾り金具」と思われた釘隠しは、石膏に上塗りを施したものであった。
- ③格天井の格縁の間隔に、少なからずバラつきがみられた。
- ④内法長押と柱の接合部に取り付けられている（②とは別の）釘隠しの六葉は、陶器製であった。
- ⑤本来なら檜皮葺きとすべきであろう屋根仕上げが、簡便な杉皮葺きであった（建築当初。現在の建物は銅板葺きとしている）。

これらの理由として、まず考えられるのは、戦時下という時代性である。第二次世界大戦下の日本では、開戦前夜の1938年（昭和13）に施行された国家総動員法により、諸資材の配給統制と使用制限が始まっていた。いわゆる金属供出が本格化する「金属類回収令」の施行は1941年（昭和16）だが、すでに政府声明で、不要不急の金属回収が呼びかけられていた。そのような時勢を背景として、新たに建設される施設に、銅など建築資材の自粛や細部仕様の劣化が生じた可能性はあろう。

だが、建築に確認された不可解な特質——あたかも、「仮設的である」ことを強調するかのような性格の理由はそれだけであろうか。繰り返しになるが、1940年（昭和15）11月に行われた紀元二千六百年式典及び奉祝会は、国家総動員体制がしかれるなかで、国体の精華と皇威の宣揚を説く目的³²⁾を体現する一連の行事のクライマックスともいえる祝典であり、式殿はその舞台となる建築であった。国民の祝賀ムードが最高潮に達するなか、天皇・皇后両陛下が臨御し、祭祀は行われた。神事に準じるような特別な祝典の会場となることを考えると、式殿には最上の格式が望まれたであろう。その姿こそ、他ならぬ「仮設的建築」だったのではないか。

（2）神事と社殿、そして建築の仮設性に念じられたもの

天皇と神事ということを考えるとき、まず想起されるのは、大嘗宮^{だいじょうきゅう}の存在である。天皇が即位しての

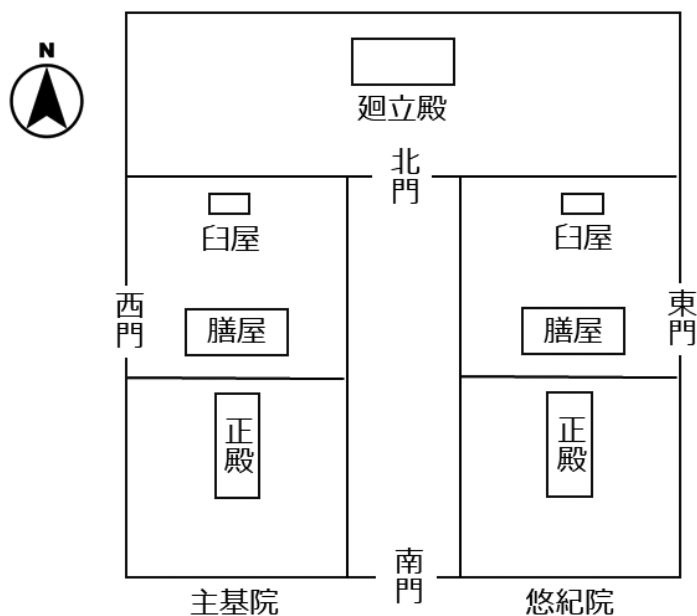
ち初めて新穀をもって天神地祇を祀る儀式を大嘗祭といい、「貞観儀式」³³⁾などによると、主要な儀礼は大極殿の前、竜尾壇上に設けられる大嘗宮で行われる。大嘗宮は東西214尺（64.2m）、南北150尺（45m）の広さで、周囲を柴垣で囲い、東に悠紀院、西に主基院を設ける。両院とも南北に分かれ、南に正殿、北に膳屋、白屋などがあり、また両院の北に廻立殿が建てられる。天皇は廻立殿から悠紀正殿、続いて同様に主基正殿に渡御して供饌、直会の儀式が行われる³⁴⁾【図4】【写真26】。

ここで重要なのは、大嘗宮が、儀式が終わればすぐに取り壊す仮設的な建築であることだ。天皇が神とともに神饌を供し、同床することによって神威を得るための儀式³⁶⁾である大嘗祭の舞台、大嘗宮は、仮設的であるがゆえに、常に清新性ととも記憶に残る建築なのだといえよう。

一方、大嘗宮に指摘し得るような、建築の（西洋的な）永続性の対極にある仮設的構図は、大嘗宮と明らかな建築的類同性を持つ神社建築にも密接な

関わりがあろう。とくに、（平入ではあるものの）反りのない茅葺きの切妻屋根、千木、鯉木、鞭懸など、大嘗宮正殿との外観的共通性が著しい伊勢神宮の社殿【写真27】は、唯一式年造替を継続している。建築を定期的に、そして意識的に解体し、更新するという世界的にも稀有な建築的慣習を保持するこの神社は、広義の仮設性によって永続的に伝統を墨守してきたといえるだろう。また、賀茂別雷神社（上賀茂）、賀茂御祖神社（下鴨）、春日大社などは、井桁状の移動性と仮設性を象徴する土台をもち、「当初から仮設的な神殿として性格づけられたもの」であった³⁸⁾。

このような神社建築における仮設性の意味に倣い、紀元二千六百年式典及び奉祝会の式殿が、聖なる記憶として、人びとの精神に残存することが希求されたのだとすれば、当初、「仮設でなくてはならない」と考えられたのではないか。特異な仕様によって仕上げられた式殿は、祭祀終了後取り壊す予定であったが、殺到する譲渡申込みをはじめとした諸々の理由により、保存されることになったのではないだろう



【図4】大嘗宮 推定配置図³⁵⁾



【写真26】絵葉書「(御大典記念) 大嘗宮の御儀」³⁷⁾
88125789

うか。そう考えるならば、石膏製や陶器製の釘隠しに託されたもの——それは、建築の仮設性に念じられた永遠性への意志だったのかもしれない。

おわりに

1940年（昭和15）11月に開催された紀元二千六百年式典及び奉祝会、その式殿の仮設的性格が示唆するもの



【写真27】伊勢神宮 内宮正殿（神宮司庁／提供）

のについて述べてきた。最後になるが、本論考を展開してきたなかで、強く印象に残ったことがある。それは、2008年（平成20）の調査で発見された棟札に墨書された3人の名である。彼らはいずれも、光華殿が竣工した3年後の1945年、悲劇的に没した。そのこと自体を興味本位に論じることは勿論慎むべきであろうが、紀元二千六百年奉祝会長を務めた近衛文麿をはじめとする3人夫々は、小金井の地における式殿の再竣工に何を思っていたのか。時勢がどうなるのか誰も知り得ないその時、建築の仮設性に託したものが、真の永遠性＝永続的建築に昇華することに、強い感慨と夢を抱いていた人びとがいたとしても不思議はない。

【註】

- 1) 『奉祝紀元二千六百年』（福島民報社、1941年）、p.1
- 2) 『天業奉頌：紀元二千六百年祝典要録』（紀元二千六百年奉祝会、1943年）、p.201
- 3) 眞下祥幸の講演による（「旧光華殿に学習院があった頃」、2024年春期えどはくカルチャー、2024年4月26日）
- 4) 2) に同じ
- 5) 3) に同じ
- 6) 奥原哲志「東京市電の花電車～その運転形態の変遷と意義」（『新宿歴史博物館研究紀要第5号』、2000年）、p.39
- 7) 林順信「花電車」（小木新造他編『江戸東京学事典 新装版』三省堂、2003年）、p.788
- 8) 『東京市紀元二千六百年奉祝記念事業志』（東京市、1941年）、p.93
- 9) 前掲、「東京市電の花電車～その運転形態の変遷と意義」、p.61
- 10) 『荷風全集第24巻』（岩波書店、1994年）、p.442
- 11) 前掲、『天業奉頌：紀元二千六百年祝典要録』、p.205
- 12) 読売新聞 1940年（昭和15）11月17日夕刊 ヨミダス（読売新聞データベース）<https://yomidas.yomiuri.co.jp/yomiuri/mts/articles/2516215>
- 13) 朝日新聞 1940年（昭和15）12月20日東京版夕刊（「朝日新聞記事クロスサーチ」から）
- 14) 朝日新聞 1940年（昭和15）12月21日東京版朝刊（「朝日新聞記事クロスサーチ」から）
- 15) 国民錬成所は、文部省直轄の錬成機関。1942年（昭和17）発行の『国民錬成所要覧』（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1123567>）には設立趣旨として、「国民錬成所はすなわち国民各層にわたる指導の人

物を入所せしめ、神聖なる浄域に肇^{ちようこく}国の古を偲^{こひ}び、聖徳の光被^{こうひ}を仰ぎ、日々報効^{ほうこう}の誓を新たにし、皇国使命の達成に精励邁^{せいれいまいおう}往する国民先達を鍊成せんとするものなり」と記されている (p.2)。

- 16) 読売新聞 1941年 (昭和16) 8月6日朝刊 ヨミダス (読売新聞データベース) <https://yomidas.yomiuri.co.jp/yomiuri/mts/articles/2573112>
- 17) 朝日新聞 1941年 (昭和16) 10月3日東京版朝刊 (「朝日新聞記事クロスサーチ」から)
- 18) 読売新聞 1941年 (昭和16) 10月31日夕刊 ヨミダス (読売新聞データベース) <https://yomidas.yomiuri.co.jp/yomiuri/mts/articles/2590371>
- 19) 朝日新聞 1942年 (昭和17) 5月12日東京版夕刊 (「朝日新聞記事クロスサーチ」から)
- 20) 朝日新聞 1942年 (昭和17) 11月12日東京版朝刊 (「朝日新聞記事クロスサーチ」から)
- 21) 『新建築』第19巻第1号、1943年
- 22) 前掲、読売新聞1941年10月31日夕刊「奉祝式典場 移築地鎮祭」の記事より
- 23) 現状の江戸東京たてもの園ビジターセンターでは、建物回りの柱間は嵌め殺しの格子とされている。
- 24) 撮影筆者。以後、特記のない場合は同じ。
- 25) 浅川範之・米山勇「聖域からビジターセンターへ—小金井公園と旧光華殿の変遷をめぐる— 旧光華殿に関する研究・2」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2009年)
- 26) 1891-1945。政治家。公爵。第1次近衛内閣：1937.6.4-1939.1.5、第2次近衛内閣：1940.7.22-1941.7.18、第3次近衛内閣：1941.7.18-1941.10.18。A級戦犯の容疑者として、逮捕直前に服毒自殺。
- 27) 1882-1945。医学者、教育者。医学博士。A級戦犯容疑者の指名を受け近衛と同じく服毒自殺した。
- 28) 1894-1945。大蔵官僚。大蔵次官、日本銀行副総裁。東京大空襲により死去。
- 29) 11) に同じ
- 30) 提供：志岐祐一
- 31) 撮影：安藤亜由美
- 32) 大串夏身「紀元二千六百年祭」(前掲、『江戸東京学事典 新装版』)、p.789
- 33) 872年 (貞観14) から876年 (同18) の間に成立したと考えられる朝廷の官撰儀式書
- 34) 日本建築学会編『日本建築史図集 新訂第三版』(彰国社、2007年)、p.123
- 35) 作図筆者
- 36) 中川武『建築様式の歴史と表現 いま、日本建築を劇的に』(彰国社、1987年)、p.42
- 37) 1928年 (昭和3) に行われた昭和天皇の御大札における大嘗宮正殿の姿と思われる。
- 38) 前掲、中川『建築様式の歴史と表現 いま、日本建築を劇的に』、p.28

【付記】

本論の一部は、『日本建築学会大会学術講演梗概集』(2009年8月)で報告している。また、本論に基づき、2004年4月26日(金)に、講演「旧光華殿に秘められた建築的謎」(『2024年春期えどはくカルチャー』)を行った。